
明日の記憶と今日の雪

岬 時雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日の記憶と今日の雪

【Zマーク】

N46720

【作者名】

岬時雪

【あらすじ】

毎日家庭内で孤独を感じながら過ごしていた「時雨」毎日を変えたいと思うことさえしなくなつたある日、母が言い出す真実に絶望するが、

徐々に集まる仲間と逃れられない運命と共に立ち向かう。

冬の色が少しづつ消えていく3月中旬。今日も鮮やかに朝日が昇り街を照らし出す。しかし住宅街には小鳥のさえずりも聞こえず、音のない寒氣のある空気が流れる。普段の生活が普段通り流れいく毎日。今日が昨日の続きなら、明日が今日の継続である。そんなことを思わせるくらい平凡に満ちた私の世界。

毎日同じ時間にアラームがなり、眠気眼でそれを止める。重たい体を氣力で持ち上げ”いつも”が始まる。今日が”いつも”と変わることはない。包まって温まつたベッドの中でもう一眠りしたい気持ちを抑えてまだ肌寒いはずの空気に肌をさらけ出しが、今日はいつも以上に气温が低いようだ。最近上がってきていた气温に喜んでいたつかの間、また異常気象が始まるとようだ。だが、それも私の学生生活に支障をきたす程ではない。それは喜んでいいのか、残念なのか、はたまた考えるところでもないのか。

とりあえず朝は時間がない、多少の气温の変化などに時間をとられている場合ではない。ワンピース風のパジャマから出た足を床につける。床には絨毯じゅうたんが敷かれているからびっくりするほど冷たくもない。きつちり整頓された部屋は中学生の私一人には広すぎるほどで、天井も無駄に高く設計されている。朝日は一級品のカーテンに遮光され、全く部屋を照らさない。部屋にある時計の秒針が怖いくらい響くほど部屋は無音に包まれていて私はそこに立っている。

今日も、”いつも”と変わらない。慣れた孤独に私が一人、たたされることに終わりはない。明日も来年もこの部屋を、家を抜け出しても。私が解放されるのはきっと、私の最期だろう。

とは言つてももう慣れた孤独。ふわふわの温かいスリッパをはいて、鍵もかかっていない部屋を出てこの屋敷の廊下に出る。この屋敷とはつまり私の家。聞いてのとおりの「お金持ち」というところだ。「お金持ち」になつたのは私の父の事業が外国で成功したため

で、何世代にも渡つて歴史を積んできた「お金持ち」ではない。そういうは言いながらも見た目は、よく一流のお屋敷である。メイドも住み込みではないが雇っているし、この廊下だって隅々輝くほどに清掃されていて、尚且つ私にはよくわからない壺や絵画などが飾られている。

そんな並外れた家庭にも愛着が湧かないのは私が孤独を感じる寂しがり屋だからなのだろうか？いつものように左右に伸びる廊下を左へ行つて螺旋階段らせんかいだんを降りる。その先には食堂、客間、父のコレクター室などにつながるラウンジがあり、私はいつも通り食堂に向かう。ラウンジにも灯りはついていたが食堂にもついている。いつも通り先客がいるようで2~3cm開いたドアを開けると香ばしいベーコンの香りと温かい空気が漏れてきた。

「おはよう」

テーブルについて先に食事をとっていた女性が私の顔を見て言った。

*～第一章～ 家庭

その女性は私の母親だった。

母は入り口から一番遠くの席についていた。

朝から身支度は万全に施して、いつどこに外出してもいいような派手すぎない清楚感のあるドレスを見事に着こなしている。

その右で母と共に食事をしていた金髪のツインテールで青い目をした女の子。

私の妹である「風遊」^{ふゆう}といつ。

彼女は私と違つて母の美貌を受け継いだのか田鼻立ちがくつきりとしていて

地毛とは思えないほど金髪が浮かないくらいの美少女である。風遊も手を止め私を横目で見るが、また料理に目を戻して食べ始めた。

これも“いつも”的ちだ。

母も言葉は交わすもののほんの挨拶程度。母は妹に付きつ切りで妹を溺愛している。

私はそれに反感を買つたこともあつたが、今ではそれが私の家庭の“いつも”なのだ。

私が食事をとらうと、入り口から一番近い席に座ることだって“いつも”的ちなら、

母と一番遠い席を選ぶ私の心境も、実際のこの物理的距離、心理的距離も“いつも”的ちである。

私が席につくと同時にシェフがいつものように朝一はんを私の前に出してくれる。

シェフはいつも料理について説明をしたがるのだが、あいにく私は料理に興味がない。

ショフが自慢げに言う素材の価値やら、香辛料のバランスやら、

私はおいしく食べられたらそれでいい。

それによつぱり朝は時間があまりない、といいつつまだまだ出発時

間には余裕がある。

私が朝から焦るようなことをしたくないだけなのだ。

だからアラームは出発の一時間前に設定するし、せめて優雅に朝食を食べる。

そのときショフの料理自慢はBGWとして不向き、それだけの話である。

母と妹が食事を終え、席をたつて母が食堂から出て行く間際に

「今日もいつも通りまつすぐ帰つてきなさい。」と言つた。

何かコレは特別なことがあるのだとすぐに悟つた。

だつてあの母親が私を心配することはないし、

だからと言って毎日寄り道もせず帰宅している私に今日は念を押して

「帰つて来い」というのだ。

今日は・・・特に大した予定のある日ではないはずだ、祖父や祖母の誕生日でもない。

家族の誕生日でも、何回忌でもない。

だとすればなんだ?

私も参加しなければならないイベントで、どこかに行くのだろうか?

だとしたら「お金持ち」同士のパーティやら何やらなのだろうか?

母の言つとおりいつも通りまつすぐ家に帰ってきた。

それが何にせよ、私は帰らなければならぬ。

帰れない理由も、予定も遊びに誘う友人もない。

でも、結局何もなかつた。

自分で驚いてしまったが、今日も一日帰宅してから特別なイベントやパーティーへの参加もなく私はあっけにとられたが、安心のせいか、日々の疲れのせいか、夕方自分の知らぬ間に眠ってしまった。

起きたのは23：44。思いがけない痛手を踏んでしまった。この家は、というか母は特に時間に厳しい人であつてこんな時間に起きている中学生なんて探せばごまんといふのだが、昔、不謹慎だと怒りを爆発させていたことがあった。が、私だって熟睡してしまっていたのだ。そして今起きてしまったのだ。

目を閉じてみると、すっかり覚めてしまった。

気づくと布団もかぶらずベッドにうつぶせたまま寝てしまっていたようで体が冷え切っていた。

「寒い」とひとつひとをいほしてみれば息が白くなるほど体温は低下してくるらしい。

電気もつけずにベッドの上で座つてみると、寒気がぞくぞくとしてきた。

すると、案の定トイレに行きたくなってしまった。

こうなるともう頭がトイレから離れない。

いくら今更布団に包まつたって、寝ようつたつて寝られない。

仕方なくこつそり部屋を抜け出して

螺旋階段を降りトイレへ入つた。

水を流す音が大きく響く。私はただただ母に見つからないように祈るしかない。

そうしてまた忍び足でラウンジを歩いていると

クシャーと何かを踏んでしまつた。突然のことについきくつして飛び

上がる私。

だが大声も上げられない、大きな音も出してはならない。
心臓の音をえりゆくさく感じながら真っ暗なラウンジに落ちてこるもの

のを

甲を凝らしてみると

「・・・ただの、紙？」

丸めて捨てられたメモのようだった。

大きさは手のひらより小さく、何か書かれているようだが
ここは暗すぎて文字まではさすがに読めない。

「・・・あはは」

聞こえてきたのは甲高い女性の声。

さつきとは色の違つよつた心臓の音に続いて、私は一気に手汗をか
いている。

（だれ？）こんな時間に。母や妹はこの時間なら寝ているはず。
だれ？・・・まさか泥棒！？）

心中で緊張と焦りと恐怖が入り混じつて冷静さを失いながらも
声の行方を捜していると、かすかに食堂に灯りがついている。

（食堂？何？やっぱり泥棒なの？でも食堂には金田のものはないだ
ろう。）

だつたらもうすぐ出てきてしまうのか

一人でに頭がぐるぐる思考を始めて高まるのは心臓の脈ばかり。
(おちつけ、冷静にならなくちゃ。)

そつして勇気を振り絞つて食堂のドアへ近づいていった。

両開きの片方のドアがかすかに開いている。

やつぱり小さい灯りがついていた。

中をみると、勇氣を持てず、息を殺して耳を前に傾けた。

「やつと今日だね」

幼い女の子のやわやかな声が聞こえた。やつと聞こえた甲高い声だ。

「やうね、もう少ししたら言わなくちゃね。」

もう一方で優雅なねつととした女性の声が響く。

どう考へても、聞いたことのある声だった。

母と、妹だ。

だけどどうして?

こんな夜中に、しかも食堂で灯りもほんの少しあつけずに・・・

私に、隠れて?

特に妬む意識はなかった。ただただ疑問しか湧かない。だつてあんなに夜更かしを怒っていた母が今こうして妹と笑って会話をしている。

それは、私を夜更かさせないため。ところどころはこの密会を私に隠す為だったということか? それともこれは今田だけ?

今日だけ?・・・帰つて来いと言つた今日だけ? どういふこと? 夕方ではなくこんな時間に何かあるとこ? しかも「もう少し」?

「馬鹿よね、あの子も。気づいてもおかしくないからこのこと」
「それは仕方ないよお母様。だって、馬鹿だもの。」

甲高い声でわらう妹。誰の話を・・・まあこの流れで行くと私だ。
しかし何?なぜこんな時間に何かがあると・・・?

「お父さんをえいなれば、あの子がここにいるはずもないのに」

急に母の声のトーンがどす黒い低いものになった。

妹は慣れた様子でそれに相槌を打つている。

「あんな子、どうして私の子供だと言えるのよ。あんな汚い子。」

「汚らわしい」

「捨てられたまま、死んでしまえばよかつたのに」

「私の位置も奪われたのよ、お母様」

「そう。風遊ちゃんの長女とこいつ位置まで奪った、あんな汚らわしい子」

「ああ。やつぱりそつか。」

つぶやいた私の声なんて

私にしか聞こえないほど、心の声か実際に声に出たのかわからない

くらい小さな

私がつぶやいたその一言なんて誰にも聞こえなかつただろう。
だけど、振り絞つたつもりだったんだ。

その一言でスイッチが入ったかのように

私はドアを自分の限界まで力を出して蹴り開けた。

小さな灯りの逆光となつて、

おそらく恐怖と驚きが混じつた表情を見ることができなかつたのが

残念だが

それでも、何も考えられないくらい私の心臓は高く脈を打つていた。
馬鹿みたいに。

私は呼吸と脈を整えるためこいつむいて肩を上げ下げしながら息をした。

どうして私がこの一人に、この状況で恐怖しなければならないのか。
どうしてこんなに悲しまなければならないのか。

どうして私は、この家にいるんだろうか。

私が顔をあげた瞬間灯りがいつもの明るさでついた。
いきなりのまぶしさに目を一瞬傷めたが、そんなこと構わずに二人
に目を向けた。

おしゃれで高そうなパジャマを着て二人でお茶をしていたらしく。
その証拠に紅茶の残り香がドアを開けた瞬間から私にまとわりつい
てきた。

二人はまだ驚いていたようだ。当たり前だろう。
いないと思っていた人の悪口を影でこそこそと言つてる最中にじっ本
人登場のシーンだ。

につこり笑われても困る。

なんて思つていると母が真顔に戻り冷静かつ端的にいつた。
「いつからいたの？」

なぜこの状況で冷静になれるんだろうか。それが私たちの距離な
か。

なら私だってそれを踏まえて言つてやるうじやないか。

「もう少しでたのしいことが始まるよつですね。こんな時間に。」

「ちゃんと質問に答へなさいよ！」

妹がしゃしゃり出てきて噛み付くような目で私を睨む。

「風遊ちゃん、少し黙つてなさい。」

驚くことに母が妹を制止した。どうこう意図かはすぐにわかつた
「聞いていたつてことでいいのね、そのドアの開け方からして。」
母は片眉をあげて嫌味つたらしくねつとりと聞くが答えなんて待つ
てもいいようだ。

「あなたは私の子供ではありません。」

母は单刀直入に眉ひとつ動かさず、さらりと言い放った。

「あなたは捨てられていたのです。近所の川の橋の下でね。よくある話でしょう？」

まさか、私がその保護者を経験するものとは思つてもみなかつたけれどね。

もちろん拾つてきたのは私じゃないわ。お父さんよ。

新しいものや、珍しいものも好きだけど、正義を氣取るのも好きな人だから。

私が何とか止めようとしても私が悪く言われるのよ、酷い仕打ちよ。その頃には私のおなかにはもう風遊ちゃんもいたのに！

あげくの果てにお父さんは結局外国で事業を開拓している途中だつたから

すぐに飛び立つてしまつて、私一人で見ず知らずのあなたの世話をしたのよ

愛せるわけもなかつたつて結果が今よ。」

ため息をついて自分の爪を見つめる母。

その爪には先週された、綺麗なネイルアートが施されているはずだ。

「でもね、それを解決するものがあつたのよ。

あなたは今から寮に入つてもらうの。学校のね。

だけどもちろん今の学校じゃない。そこから勧誘が何度も来ていてね。

そこは一般人じゃ入れない学校らしいの、いいでしょ？

周りからの評判もまた上がつてしまつわ

クスクス嬉しそうに爪を見ながら笑う母は妖艶な悪魔のように見えてくる。

「だから、今から支度しなさい。10分よ。

ああ、はやく…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4672o/>

明日の記憶と今日の雪

2010年10月23日18時41分発行